大正13年３月　豊川で熊が人を襲った話

『豊川区開基百年記念誌　ふるさと』掲載から抜粋

（略）大正13年３月20日のことである。治水工事の大事業も完成し、洪水の一番被害のひどかった17号近辺、水害の心配だけはなくなって一安心の矢先。当時の豊川では治水工事の飯場などもあり、民家も割りに多く、にぎやかだった地区、まだ工事の後片付けも完全に終わっていなかった頃のこと、一民家を手負いの熊が襲った。

農業のかたわら馬車追いをしていた旦那さんが、仕事を休んで今年１年生に入学する女の子を連れて常呂の町へ馬そりで学用品を買いに出かけた留守のこと、表で何か音がしたので、早、旦那が帰るわけがない誰かお客さんかと思っていた奥さん、子供らを手元に遊ばせながら針仕事をしていたが、突然窓ならぬムシロ戸からヒョッコリ熊が顔を出した。

腰を抜かさんばかりに奥さんは驚き、乳飲み子を脇抱えに裏口をこじ開け逃げた。飛び出した奥さんに気づいた熊は後ろを追う、奥さんは逃げまどううちつまづいて転び、必死で子どもを腹の下に抱え込む、熊は後ろから襲いかかり、奥さんは背中を爪で何度かひっかかれ血だるまになった。熊は死んだのかと思って姿を消した。

奥さんはやっとの思いで近所に助けを求めて大騒ぎになり、聞きつけた狩人や大勢の人たちが集まった時には、熊はすたこらイワケシュ山へ登った後だった。怪我した奥さんを早速ベタぞりに乗せて馬を引かせて常呂の病院へ入院、全快するのに１ヵ月余りもかかった大怪我だったという。当時の医者は軍医あがりの武藤という先生だった。

以後、熊が人家を襲ったという話はあまり聞かなくなったが、昭和に入ってからでもたまたま熊が出没し、馬や牛それに綿羊などが襲われた。

富丘、豊川のイワケシュ山の山麓、それに福山の川向かいの山などでもつないである綿羊などは、毎年のように何頭かは熊に捕られ、昭和30年頃までその被害があり、その被害は甚大なものだったという。（略）